

万博計画具体化検討ワーキンググループ 議事要旨

日時：令和元年6月14日（金曜日）13時～15時

場所：経済産業省本館17階西7第1特別会議室

出席委員（五十音順）：石川委員、齋藤委員、佐野委員、澤田委員、豊田委員、西口委員、橋爪委員

有識者（五十音順）：ウスビ・サコ氏（京都精華大学 学長）、沖 大幹氏（国際連合大学 上級副学長）、北川 フラム氏（株式会社アートフロントギャラリー 代表取締役会長）、小西 利行氏（POOL INC. ファウンダー）、高橋 政代氏（理化学研究所・生命機能科学研究センター プロジェクトリーダー）、西尾 章治郎氏（大阪大学 総長）、野村 卓也氏（一般社団法人ナレッジキャピタル 総合プロデューサー）、堀江 貴文氏（SNS media & consulting 株式会社 ファウンダー）

議事概要：経済産業省から大阪・関西万博について説明があった後、各有識者から大阪・関西万博の開催に向けたご意見紹介とWG委員と有識者とのフリーディスカッションを行った。主な意見は以下の通り。

（サコ氏）

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ これまでの万博の歴史を見ると、基本的にはその時々々の社会問題を示したり、社会のあり方に対して提言をする形式が多かった。本日は万博で示すべき四つの事項について話したい。
- ・ 一つ目は社会問題の提示についてである。現在、「個」を中心とした社会が発展している。これまでは家族という単位やその家族をモデル化した単位があった。しかし、現代は「個」が中心となっている社会である。その社会をどのように描いていくのか。都市やコミュニティの中でどのように作用するのか。万博会場を「新」人間社会の未来像を提示する場にできればよいと考えている。「個」を中心とした社会構造、多様性が尊重され、選択と責任のある生活、健康、仕事などの提案・メッセージを発信できればよい。
- ・ 二つ目は生活モデルについてである。学生がUber Eatsを利用して買い物をしていることに驚いている。1939年のニューヨーク万博では、消費者の視点から万博をプロデュースし、今、我々が食しているジャンクフード等が発表された。万博を通して、新しい生活モデルの提案ができればよいと考えている。
- ・ 三つ目の大きな焦点はSDGsである。SDGsがあちこちで謳われているが、本当に皆、SDGsについて理解をしているのか。私の出身国であるマリではSDGsのバッジを付けていても、ほとんどの人がSDGsを知らない。ヨーロッパでも「このバッジ

は何ですか」と言われるくらい浸透していない。世界中のSDGsに対する取り組みとバランスが取れていないのではないか。

- ・ 四つ目は環境と自然への回答である。パリ協定や京都議定書という目標がある。それらが果たして達成されているのか、一つのモデルを万博で示す。
- ・ コンテンツとしては、都市モデルや社会モデル、生活モデルの一つの答えを示すのがよいだろう。見せ方はビジュアル的なものだけではなく、様々なテクノロジーの発展を踏まえて工夫できればよい。
- ・ テクノロジーが浸透した5Gの時代である。万博の会場では十分にテクノロジーを使って、待ち時間の短縮や顔認証による入場等の取り組みができればよい。移動手段も重要である。愛知万博の際は、移動時間が退屈であった。移動時間をアトラクションにする取り組みやバーチャルツアーを実施する等を会場計画に入れ込んでもらいたい。
- ・ 地元の関わり方が非常に重要になる。愛知万博でも「一市町村一国フレンドシップ事業」を実施していたが、万博終了後は、迎えた国々がまるで最初から来なかったかのようになっていた。大阪・関西万博を契機として地元のグローバル化を進めることができればよい。
- ・ 愛知万博の際、アフリカ共同館にアドバイザーとして携わっていた。アフリカを共同館としてまとめること自体が「遅れている」と言わざるを得ない。地図を見て国の配置を決めるということ自体、アフリカの問題を理解していないと言わざるを得ない。国と国の壁が低くなっている、グローバルの時代なので見せ方は工夫できるのではないか。

(沖氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 土木学会が「22世紀の国づくり」という提言を発表した。その中には地球エレベーターや朝鮮半島とつながるトンネル等の話が記載されているわけではない。私たちがこれから取り組まなければならないことが土木の観点に限らず記載されている。
- ・ 22世紀の国づくりを考えるということは、私たちの幸せとは何かを考えるということである。「幸せ」の視点。国家百年の計が人材育成であるとする、国家千年の計は文化の醸成である。「文化」の視点。21世紀の世界史にどのような歴史を刻み、22世紀を迎えたいのか。野心を語るべきである。「野心」の視点。「幸せ」「文化」「野心」と土木学会らしくはないが、こうした観点からまとめられている。
- ・ 万博では皆が集まるので、22世紀に向けて夢を語り合うことができればよい。逆に、やってはいけないことは、SDGsに反するような行為である。
- ・ SDGsをチェックリストとして使うことに加え、オポチュニティーとして使うことを考えると、これから伸びそうな発展途上国に、大阪の中小企業が直接投資をするような場やきっかけがあればよい。発展途上国の現状を知り、「このようにすればうまくいくのではないか」ということが実感できるような場があればよい。

- ・ SDGsに関して話をしたい。SDGsだけ達成できればよいというわけではないと考えている。例えば、SDGsには文化の多様性や知的好奇心の充足といった視点は含まれていない。SDGsの達成は国際社会にとって非常に重要だが、それだけで幸せな2030年や2100年を迎えられるわけではない。吉本興業の方々にSDGsに関わっていただいているが、笑いやエンターテインメントの要素も含まれていない。モノからコトへと言われている、現在のグローバル化した経済の中で、エンターテインメントは非常に重要だと考えている。
- ・ 後世に残すべきものは何か。それは形があるものではなく、形がないものだろう。アイデアや芸術、サービス等、形はないがバリューがあるものに対して、安ければ安いほどよい、支払いはしないという文化が育ちつつあることに懸念を抱いている。価格が安ければ安いほどよいのではなく、価値があるサービスや感動を受けたときはきちんとそれに見合った対価を払うという文化があったのではないか。お金にうるさいと評される関西圏において、それに取り組むのは非常に重要である。お金の価値を知っているからこそ、適切に使わなければならない。すごいものに対してきちんとお金を払い、経済を回していくことができていないので、経済が停滞しているのではないか。「三方よし」の考え方に象徴されるように、ビジネスを通じた社会課題の解決が、巡り巡って自分の利益になるということが万博を契機に広まっていけばよい。
- ・ コンテンツに関しては「歌って踊れる万博」とするのが重要である。私たちが何のために豊かさを求めるのかというと、幸せのためである。
- ・ ハロウィーン時の渋谷の騒動を見て、人間にはあのような場が、ある意味必要だと感じた。万博の体験はバーチャルでもよいのではないかといった主旨の議論が過去のWGではあったようだが、様々な人が実際に集まり、何かを一緒にやるような場が非常に大事なのではないかと考えている。今更3Dの眼鏡で立体映像を見ても感動しない。もはやそのような時代ではない。
- ・ 一緒に踊った仲間はお互いが気に入れば、言葉の壁を越えてSNS等でつながり、コミュニケーションを取ることができる。こうしたことをテクノロジーによって可能にすれば、祭りの場の意味が出てくるだろう。
- ・ 8月1日は「水の日」なのだが、知名度が低い。8月1日を水かけ祭りの日とする提案をしたい。歩いている人に水をかけてもよいという常識を日本で作り、水の日を盛り上げていくきっかけになればよい。
- ・ 祭りにはやはり屋台が必要である。屋台は文化にふさわしくないと考える人もいるかもしれないが、大学の学園祭でも屋台がメインコンテンツである。屋台を目当てに会場を訪れ、ついでに文化的なものに触れるという流れを作り出すことができればよい。「お腹が空いたので美味しいものが食べたい」という欲求が優先かもしれないが、そうした欲求や祭りといった「楽しいもの」を契機として、色々なものに触れることができる場所にする事ができればよいだろう。

(北川氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 瀬戸内国際芸術祭は三年に一度開催され、今年で第四回となる。約100日間の開催期間に約150万人が訪れる予定である。多くの人々が会場を訪れているが、特筆すべきことは、外国からのサポーターがこの春の時点で延べ約1,000人いることである。アートという、手間暇がかかり、理解しがたく、面倒くさいものを様々な人々がケアすることによってつながっていく。いわば、赤ちゃんを皆でケアしながら仲良くなっていくというようなことが起きている。
- ・ 前はアジアから多くの観光客が来場した。しかし、今年になって欧米からの観光客が増えている。NATIONAL GEOGRAPHIC TRAVELLERやニューヨーク・タイムズ等で瀬戸内が紹介され、欧米人の人気観光地になった。
- ・ 日本の面積は世界の国の中で62番目であり、海岸線は世界で6番目に長い。極東の島国である。その国がどのようなことをやってきたのか。それをしっかり見せることで、私たちの生きる今の地球がよくわかるだろう。
- ・ 川あるいは海に背を向け、内陸に目を向けていったことから大阪の衰退が始まったと考えている。会場内を道路でつなぐのではなく、水路で瀬戸内とつなぐのがよいだろう。
- ・ 植民地主義の名残が濃厚に残る中、格差がどんどん広がっている。
- ・ 地域の人たちと本当の意味の共同作業をしてほしいと考えている。それが極東の島国の日本がこの時期にやることである。そのバックボーンとして、国連が「サステイナブルな観光」を打ち出している。様々な地域の、色々な生活をしている人たちと出会う機会を作り出してほしい。そうした別の文化に触れて、理解することが平和に対して重要である。準備を様々な地域の人々で行うことに全精力を傾けるのがよいだろう。越後妻有では、中国や香港の人々が、自分たちの資金で空き家を使いながらパビリオンを作り始めた。このような取り組みも参考になるのではないかと考えている。
- ・ 国が単独でやることはとにかくダメなので、色々な人たちが関わりながら取り組む仕組みができればよい。それができないなら、「今どき万博をやるのか」と言われるだろう。こうした取り組みができるかが大事である。

(小西氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 私の専門はコミュニケーションデザインであり、その知見から話をしたい。
- ・ 経済産業省と共にプレミアムフライデーの計画・立ち上げを行った。プレミアムフライデーは多額の資金を費やすことなく、97%という高い認知度を獲得している。うまくやれば、多額の資金を費やすことなく、知名度を上げることができる。この取り組みを大阪・関西万博にも応用できるのではないかと考えている。

- ・ ドバイ万博の日本館を担当し、様々な人々と話をして感じる一番の課題は「万博を知らない」ということである。色々と話をしても、まず万博が知られていない。知ってもらわなければ、興味も持ってもらえないし、資金も拠出してもらえない。何もしてもらえないので、まずは知ってもらうことが重要である。
- ・ 大阪・関西万博は自国開催なので、知ってはもらえるだろう。しかし、知ってもらったところで万博について話したくならなければ意味がない。「話したくなる万博」にしたい。話したくなるとはどういうことか。最終的には居酒屋で話されるようになれば最高だと考えている。話したくなるとはいっても、ただ面白いネタを万博で展示するというわけではない。世の中には意識を高く持っている人たちが数多くいる。世界に向けて提言していくような高い視座で物事を語れば、様々な人々がついてくる。意識が高く話される万博にしたい。
- ・ 万博の存在意義が問われている。オリンピックがスポーツの祭典なので、万博は技術の祭典であると言われることもあるが、万博は知恵の祭典であると考えている。世の中をよくしていくための知恵が世界から集められてきた場である。知恵の祭典として、もう一度きちんと取り組みを行わなければならない。
- ・ 技術であれば、サウス・バイ・サウスウエスト等のイベントが世界中にあるので、万博の場で技術を見ても目新しさが無い。エンターテインメントも数多くのイベントがある。サウス・バイ・サウスウエストと勝負するのではなく、万博は国家レベルで知恵を出し合う祭典にすればよい。そのように考えれば、色々なことが再構築できるだろう。
- ・ しかし、何の知恵を出し合うのかという話になる。私企業ではなく、国家のレベルで取り組むものなので、地球をリデザインする、よりよい地球にするためにはどうすべきかを考える場とすればよいだろう。地球のリデザインをテーマとして、全参加国が集まるフォーラムを展開し、そこから何かが発表される、発信されるというくらいまで万博の地位を上げていくことが重要なのではないか。毎回、万博で未来に向けた新しい提言がなされ、それが宣言として発表される。それを聞きに行こう、見に行こうということだけでも、人々の意識が高まっていくのではないか。
- ・ それを実現するために、上の世代がある程度は道を譲り、若者の万博と言われる始まりとなればよい。スラッシュ・アジアの立ち上げに参加した。スラッシュ・アジアは多数の人々が参加するスタートアップ・ムーブメントであるが、ほぼ学生が運営しており、大人がほとんど関与していない。そのようなことが若者にもできる。少なくとも、大阪・関西万博のどこかの部分は若者だけで展開され、若者の万博が始まった場であると言われるようにしたい。
- ・ ドバイ万博の日本館に日本企業がなかなか出資をしてくれない。大阪・関西万博も資金面は非常にシビアだと思うが、大企業を行脚してタニマチ的に出資を募るのは限界なのではないかと感じている。スタートアップのムーブメントに手を付けていくのがよいのではないかと感じている。スタートアップ・ムーブメントを考えると、万博は世界とつながるス

ページであると捉えることができる。万博をステージと捉えれば、そこで発表できるということが大きな価値になる可能性が高い。スタートアップ・ムーブメントが世界に出ていくステージとして、何らかのエコシステムを作っていくべきだと考えている。

- ・ 資金が集まってくる万博とすることができればよい。プレミアムフライデーはメディアと連携することによって、作り上げた一つのシステムである。メディアと万博と企業をつなぎ、新たなタイプの集金システムを作り、メディアから世の中に万博の意味や意義、内容が伝わっていくような形を作ることができればよい。

(高橋氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 理化学研究所の本部に未来戦略室がある。ここで100年後の社会を考える取り組みを行っている。100年前の明治の時代に報知新聞が発表した未来予想図は、現時点でかなりの部分が当たっている。100年後の未来を今予想すると、多くの部分が当たるのではないかと考えている。そうした社会を提示していきたいと考えている。100年後のことを考えるフォーラムで話されていたことの一つに価値観の転換がある。資本主義の問題点が浮かび上がってきているので、「幸福」や「やりがい」が通貨になる世界がよいのではないかと提言をした。実現は難しいと考えていたが、万博会場の中なら、理想の社会を提示できるかもしれないと感じた。
- ・ 大阪・関西万博は1970年の大阪万博に続く、大阪の地で開催される二度目の万博である。モノではなく、システムを提示していくことができればよいだろう。前回の大阪万博の後にピクトグラムが残り、普及した。このようなものを提示していくことができればよい。新しい社会像を示すので、若手を起用すべきだという意見にも賛成する。
- ・ ライフサイエンスや健康がテーマの一つだと考えているが、医療者からの提言として、「健康」という言葉は使わないようにしてほしい。超高齢化社会になり、皆調子の悪い箇所があるのに、「健康」という本来あり得ない幻想に苦しんでいる。「健康」「正常」といった幻想のその先を提示することによって、真のインクルーシブを提示することができるのではないかと考えている。
- ・ 再生医療は関西の強みである。世界の舞台においても、関西のライフサイエンスは大きな強みである。半年もの間、万博は開催されるので、海外からの観光客が長期滞在し、万博の観光と一緒に再生医療を受けるような体制も作ることもできるのではないかと考えている。再生医療や遺伝子治療は高額だが、日本にはそれを安くすることができる法律もある。手術と観光を併せ、真にインクルーシブな社会を楽しんでもらうことができるのではないかと考えている。
- ・ 神戸アイセンターを紹介したい。GoogleやAppleが医療に参入し、眼科はAIに代替される時代になっている。そうした時代において、人間が負けないものは何かというと、創造性と人間性である。このような時代において、どうすべきか考えて作

ったのが神戸アイセンターである。決して規模の大きくない単科病院なので、非常にフレキシブルである。「病院に見えない病院」を作ってほしいと要望した。「行きたくなる病院」ということで、グッドデザイン賞も受賞し、たくさんの人に見学に来てもらった。お互いが助け合う場所を作り、真にインクルーシブな病院を作った。

- ・ 神戸アイセンターでは医療、ケア、福祉をワンストップでできるようにしている。医療と福祉は今まで分断されていたのだが、効果を上げ始めている。福祉も縦割りで機関同士のつながりが薄かったが、神戸アイセンターを触媒としてつなげることができた。最近教育も入ってきており、プラットフォームを作ることによって、どんどん新しいものや取り組みが入ってきている。患者のためによりよいことをしようとしても、ルールが固く、できないことが多かった。神戸アイセンターの取り組みは、患者のためになるシステムをひな形として作ってみたということである。今まではルールが中心で患者中心ではなかったのが、患者を中心にしたときにどのような世界になるのかを提示していくことに取り組んでいる。本当にあるべき医療や健康、社会とはどのようなものになるのか、理想の医療やヘルスケア像を提示することができたらよいと考えている。
- ・ 医療者として障がいの当事者たちに接していて感じることもある。重度の障がい者には光が当たっているが、比較的症状の軽い障がいのある方や困っている人たちは、障がいを隠し、社会の中で声を上げることができていない。万博に来たら、そうした人たちが臆することなく声を上げることができ、彼ら/彼女らを特別扱いするのではなく、来場者が、ボランティア活動をして、障がいのある方や困っている方を助ける体験をして、その体験を持ち帰るようなことができればよい。
- ・ 現在は健常者中心の世の中になっているが、その中心を少しだけ障がいのある方々の方向に移すことができれば健常者も含め皆が幸せになるだろう。そのような価値観が広まった社会を提示することができればよいと考えている。

(西尾氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 2003年に制定した「大阪大学憲章」という本学の基本方針の下、社会課題の解決に向けて、「いのち」に向き合い、社会と一体となった創造活動（共創）に取り組んでいる。ここで言う「いのち」とは人間の命はもとより、多様な生命の「いのち」をも想定している。我々が取り組むべき困難な社会的課題の根底には「いのち」の危機があると考えている。
- ・ 我々の「いのち」に向き合う研究は「いのち」をまもる、はぐくむ、つなぐという三つの観点から構成されている。万博として取り組むべきことは大きく分けて二つある。一つ目は「いのち」をまもり、はぐくみ、つなぐための科学技術の最先端を示し、体験してもらい取り組みである。もう一つは「いのち」について世界の人々と共に考え、対話し、未来社会を構想する取り組みである。

- 一つ目の取り組みについては大阪大学が長年取り組んできた医療や健康、脳科学分野等における最先端技術を紹介していくということを考えている。その中で「都市型デジタルヘルスケアコミュニティ構想」というものを考えている。コミュニティ全体をホスピタルとして捉える時代が必ず来る。それに対応して、健康・長寿を図る医療や都市計画のあり方を構想し、医学や医療、ヘルスケアに関する研究と実践に取り組むことを構想している。最先端技術を体験するベネフィットとして、例えば、万博会場に一回行けば健康寿命が一年延びるといった、わかりやすいメッセージを発信することができれば多くの人が興味を持ち、リピーターとして足を運ぶのではないかと考えている。「都市型デジタルヘルスケアコミュニティ」を体験してもらい、健康・長寿に関する提言をしたい。
- 人間は人間を認識する脳を持つと言われている。人間らしいロボットやアンドロイドは認知科学や脳科学に基づく人間理解の研究や意識・情動の研究に不可欠である。大阪大学教授のロボット研究者、石黒浩博士は、人間と共生する自律知能システムの実現に取り組んでおり、こうした技術も万博の会場で紹介することが可能だろう。
- 来場者のパーソナルデータやビッグデータ等の解析を通じて、熱中症対策、防犯、迷子などの対策に取り組むことができるだろう。重要となるのはパーソナルデータを安全・安心に活用していくための社会的なルール作りである。それを整備しなくてはならない時期に来ている。データの標準化やセキュリティ対策、個人情報保護、データの二次利用など、データのライフサイクルを通じたデータハンドリングのルール整備が求められる。未来型のプライバシーを策定し、それを世界標準とすることによって、2025年の万博のレガシーとしていくことも想定される。
- 夢洲は海との接点であり、ウォーターフロントである。古代よりウォーターフロントでは、日本の新しい何か、すなわち、大きなイノベーションが起こってきたが、その典型が大阪であった。実際、大和朝廷にあって難波宮は、水運の要衝として8世紀末まで陪都であった。現在でも大阪・関西はイノベーション創出に最適な地であると考えている。サントリーの創業者である、鳥井信治郎氏の「やってみなはれ」という言葉はサントリーグループのみならず、世界の共通語になっており、「Disruption」の重要性を表している。この鳥井氏の言葉に代表される、創造的革新、「Disruption」を恐れない風土が関西には根付いている。京都・大阪・神戸という異なる街の風土、文化、市民性に代表されるダイバーシティ(Diversity)もイノベーションを起こすための二つの「D」のうちの一つである。
- 会場計画は地域の特性を生かした万博として、夢洲をメイン会場としつつ、関西広域にサテライトを設け、大阪・関西、そして日本全体の盛り上がりにつなげていくべきだと考えている。また、万博終了後に取り壊すパビリオンを作るのではなく、猛暑対策や災害対策、地球温暖化対策、健康・長寿等のモデルとなるような持続可能な街づくりが必須であると考えている。

- ・ 「未来社会をデザイン」することをコンセプトで謳っていることから、未来を担う若者の声を反映させた万博とすることを提案したい。健康寿命が一年延びると言っても若者には訴求できない。万博の企画段階から中学生や高校生、大学生に積極的に関わってもらい、企画の実現に向けて大人たちが支援をするという形を取ることで、世代を超えたイベントになると確信している。大阪大学はチャレンジ精神を持った学生が集まるコミュニティである。例えば、イノベーターズクラブという集まりもあり、このような取り組みに積極的に貢献することができる。
- ・ 「いのち」について、世界の人々と考えて対話をし、未来社会を構想する取り組みができればよい。これまでの大阪大学の経験から、有識者によるシンポジウムよりも、市民と一体となって共創するシンポジウムが非常に効果的であると考えている。SDGsからポストSDGsという流れを念頭に、「いのち輝く未来社会」について専門家から情報を提供された一般市民による熱心な議論の場を提供していくことが重要だと考えている。
- ・ これらの取り組みを通じて、最終的には「いのち輝く未来社会」を実現するための「大阪いのち宣言」を策定し、万博の場から世界に発信することを提案する。宣言は万博後の世界各国における諸活動やポストSDGsの方向性を検討する上で指針としての役割を果たすことが期待される。この「大阪いのち宣言」が、実践のみならず、理念においても2025年の大阪・関西万博が残す最大のレガシーとなり得ると考えている。

(野村氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ 神戸ポートアイランド博覧会のダイエーパビリオン「オムニマックスシアター」の企画を担当し、開催期間中は副支配人を務めた。神戸ポートアイランド博覧会において、ダイエーパビリオンは開門と同時に行列ができる人気館であった。やはり万博を開催する場合、人気面は意識しなくてはならないだろう。
- ・ 本日のWGのテーマはレガシーである。せつかくの「大阪・関西万博」という名称なので、夢洲を中心として大阪・関西のベイエリアを再定義するべきであると考えている。大阪ベイエリアの概念を広げ、神戸や大阪のうめきた、関西文化学術研究都市、京都、奈良、和歌山まで含めた、新しい産業や文化の地域として打ち出していくべきではないかと考えている。現在、世界において三大ベイエリアはニューヨーク、サンフランシスコ、東京だと言われている。これに加えて、中国が香港、マカオ、深圳、広東のグレートベイエリアの創出に取り組んでいる。しかし大阪・関西のベイエリアはそれ以上のポテンシャルがあるのではないかと考えている。
- ・ 祝祭都市を目指すべきだと考えている。大阪では明治36年に第五回の内国勸業博覧会が開催され、大正14年には大大阪記念博覧会が開催された。その後も、毎年のように大きなイベントや博覧会が開かれていた。大阪・関西万博の後も毎年のようにフェス

ティバルや大型のイベントを開催し、祝祭都市として世界から人を呼び寄せることが重要であると考えている。

- ・ 子供の心に残るようなレガシーを作るべきだと考えている。史上ナンバーワンの目標を作り、それを皆で達成するような取り組みができればよい。目標を達成していくことも大事なのではないかと考えている。特に重要になるのは人材育成である。新しい学びを提供していくことが必要になるのではないかと考えている。堀江氏が取り組む「ゼロ高等学院」は単に教室で勉強するだけではなく、社会全体で受け入れ、社会の中で勉強していくという取り組みであると理解している。万博では多言語、多文化という環境が提供される。この環境の中で学んでいくことができればよい。
- ・ コンテンツについて話をしたい。大阪・関西の特徴は「人」である。もう一つが「多様性」である。「人の多様性」を示すためにアワードを毎日実施するのはどうか。185日間で185個のアワードを実施する。企業や自治体、団体がそれぞれテーマを設定し、毎日様々な分野のチャンピオンを決めていく。多様な価値観が評価され、認定される場として、万博の最終日には185人のチャンピオンが生まれるという仕組みはよいのではないかと考えている。参加者全員の爪痕、痕跡が残る万博にできればよい。参加した人たちが何らかの形でモニュメントや壁画等の制作に関わり、全員で作りに上げていく。万博の開会後だけではなく、今の段階から始めて、少しずつ皆で作りに上げ、万博の最終日に完成するという形も取ることができるのではないかと考えている。
- ・ チケットデザインには可能な限り多くのクリエイターやデザイナーに関わってもらい、多様なデザインのチケットを販売したい。チケットを入手したいからリピートをする（チケットを買う）というくらい影響力のあるチケットデザインができればよい。
- ・ 会場のインフラについて話をしたい。「いのち輝く」をテーマにしているので、ストレスフリーの会場にする必要があるだろう。そのようなテーマを掲げながら、行くだけで疲れ、会場内でイライラするといったようなことがあってはならない。いかにストレスフリーの環境を作っていくのが重要である。例えば、日本はトイレに強みを持つので、「トイレビル」を作り、待たなくてもスムーズに入れるような仕組みを作ることができればよい。日本の優秀なトイレ技術を見てもらいつつ、ストレスフリーの取り組みができればよい。
- ・ 若い世代は、万博に対しての認識が薄く、万博という言葉自体を知らない人も多い。万博を二週間程度のイベントだと考えている人もいる。パビリオンという言葉も通じない。まず若い人に興味を持ってもらい、認識してもらおうということが重要であると考えている。今から、若い世代に向けたプロモーションや普及活動をするべきなのではないかと考えている。子供も含めた若い人たちに興味を持ってもらう取り組みを、可能な限り早くスタートすることが重要になるだろう。

(堀江氏)

- ・ [意見書に基づき説明]
- ・ オンラインサロンという仕組みを使い、人間の生き方改革のような動きを実践している。現在、オンラインサロンの会員は1,300人ほどである。
- ・ AIやロボットの時代になり、ホワイトカラーの仕事の大半は必要ではなくなっている。必要ではない仕事をしている人が既に9割以上になっていると考えている。会社を経営しているが、もはや人を増やす必要がない。クラウドのサービス等のツールを使えば、人を雇わなくても大きな仕事をするのが可能になっている。
- ・ つまり、世の中の9割が定年後のサラリーマンのようになっていく。定年後のサラリーマンはやることがないので、コミュニティが非常に限定されてしまう。世代を分断するような意見があったが、私はそこが諸悪の根源であると考えている。私たちは小学校、中学校の9年間、同じ世代の同じ地区に住む人たちと過ごす。このことを私は異常だと考えているが、世間ではそれが当たり前になっていることが分断を作り出しているのではないか。定年後のサラリーマンは会社に行く必要がなくなるので家族しか拠り所がない。子供たちも独立すると、配偶者しかいない。配偶者は会社以外のコミュニティを既に構築しているので、定年後のサラリーマンだけが孤立してしまう。
- ・ そうならないようにするために、ダイバーシティが非常に重要になると考えている。人種や国籍、性別に限らないコミュニティを形成するような動きをしない限り、10年後に「サラリーマンの孤立」は大きな社会問題になっているのではないか。つまり、大阪・関西万博の前後の時期に大きな社会問題になっていると想像できる。今の子供たちに対しては、教育制度等を改革することによって、ダイバーシティを重視したコミュニティの形成を促すことができると思うが、50年、60年生きてきて、固定化してしまった上の世代はどうしようもない。しかし、どうしようもないからと言って彼らが分断されたままでは社会問題となり、社会が不安定化してしまうので、そうではないような動きをする取り組みがあればよいだろう。
- ・ 具体的にどうするのかは落とし込まなければならないが、万博をきっかけとして、年齢や性別、国籍に限らないコミュニティを作っていくことが重要である。万博の場をそうしたイベントの場にすればよいのではないかと考えている。幸いなことに、スマートフォンやインターネットがあるので、そのような場を作ることは容易である。同じ世代の同じ地区の人以外とコミュニティを作ることが今では非常に容易である。そのことを私はオンラインサロンで実践している。イベントをしたり、合宿をしたりして、人生の暇つぶしのネタを今から学ぶという取り組みである。
- ・ 今、皆様がやっている仕事も100年前は仕事ではなかったのではないか。昔は遊びだと思われていたことが、今は仕事になっている。恐らく、将来においてもそうだろう。eスポーツは本質的にはゲームをやっているだけであるが、お金をもらって仕事にしている人たちが数多くいる。
- ・ 私が取り組む「ゼロ高等学院」は高校とは名乗っているが、「高校を否定する高校」で

ある。オンラインサロンと同じ仕掛けであり、オンラインサロンに通信制の高校があって、OEMでDVDの教材を配布しているものである。私自身は普通科の高校は必要ないと考えているが、「高校だけは出て欲しい」という親の要望があるので、高校を作った。

- ・ 万博で具体的に何をやるのかはこれから落とし込んでいかなければならないと思うが、万博に来た人たちが仲良くなり、未来の生き方のようなものを実践できるような場になればよいだろう。お仕着せのパビリオンで新技術を体験してもらうようなコンテンツは面白くない。万博に来た人たちが、参加型で何かを作り上げる取り組みができればよい。皆でたこ焼きやお好み焼きを作るといったものでもよい。そういったことを万博の会場外にも波及させ、大阪や京都のグルメも楽しもうといった流れになれば面白いのではないか。
- ・ 寿命が今後、さらに伸びていくので、健康で楽しい人生を全うできるような世の中づくりが求められている。そのようなことを考慮したイベントに万博がなれば面白いのではないか。

(経済産業省)

[個別ヒアリング(資料11～資料18)の内容紹介]

(澤田委員)

- ・ サコ学長のご指摘にあった発展途上国をはじめとする参加国の多様性をきちんと示すということは非常に重要である。愛知万博ではエリア別でそれを示していたが、ミラノ万博ではテーマとのつながりを多少は意識して展開していた。愛知万博に携わった経験から、どのようにすれば多様性を見せていくことができるかと考えているのか、サコ学長にご教示いただきたい。

(サコ氏)

- ・ 発展途上国の万博への参加は資金面も含め、開催国に依存している側面が強い。参加型とは言っても、途上国の声を吸い上げる場がないのが現状である。「呼ばれたので万博に参加した」のではなく、発展途上国が自分たちの意思で万博に参加したという意識を持てるようにすることができればよいだろう。企画段階から、その国がどのようなものを見せたいのか、どのようなことをやりたいのかをしっかりと整理していくことができればよい。
- ・ 現状は予算やルールを伝えられ、開催国側の都合に合わせた「お客さん」として参加していることが多い。「お客さん」としてではなく、「自分たちの万博である」という意識を持って参加するようになればよい。

(齋藤委員)

- ・ 2020年のドバイ万博も含めて、万博を若者の活躍の場にするべきであるという議論が本WGでは毎回なされている。2025年の大阪・関西万博は当然、若者の活躍の場とするべきだと考えている。関西圏の大学が群となり、一つの団体となって、プロセスから学生と共に活動に参加するという形は考えられるのか。そのプロセスに大学教員や海外の研究者が合流する形も考えられる。本日は大学関連の方が多くいらっしゃるということでご教示いただきたい。

(サコ氏)

- ・ 堀江氏が「高校は必要ない」とおっしゃっていたが、その議論は非常に重要であると考えている。私は昨今の大学生は面白くないと考えている。夢を見ない風潮があり、非常に現実的である。こうした風潮を作った原因は大人にあると考えている。ご存じの通り、大学の競争率は就職率で測られることが多く、多くの大学は学問よりも就職に力を入れ、人気取りをしている。「未来がない」「経済がより悪化していく」等の、いかに未来が暗いのかを述べた言説が大人によって流布されており、若者社会がコントロールされている。サラリーマンの老後はある意味「ニート」のようなものなので、今からニートについて学んでもよいのではないか。
- ・ グループがあれば、大学を超えた取り組みも可能だが、その時に、教員（大人）は入れるべきではない。大人は形にこだわってしまう。若者で作るネットワークはイベント等をうまく実施している。問題は、私たちが姿勢を下げられるかである。若者ではなく、大人の側に問題があると考えている。

(西尾氏)

- ・ 京都には「大学コンソーシアム京都」、大阪には「大学コンソーシアム大阪」があり、それぞれの地域での大学間の連携はある。ご意見を踏まえて、活動を上からコントロールするのではなく、学生にある種のイニシアチブを与え、学生自らの手で活動を展開していく形を取ることができればよいだろう。
- ・ 万博という、関西エリアの学生たちが他大学の学生たちと共に活動をするための目標が見えている。自分の在籍する大学の中に閉じこもるのではなく、留学生もどんどん巻き込んで活動を展開するようなことが一つの大きなムーブメントになれば、万博の成功に対して大きな力になると考えている。
- ・ 学生たちのそのような活動に対して必要最小限であっても、資金的な援助をすることができれば、学生たちは活発に活動を展開できる。いただいた提案は非常に重要だと思うのでしっかり受け止めたい。

(橋爪委員)

- ・ 大阪には「南大阪地域大学コンソーシアム」もある。大学間の連携には既にあるコンソーシアムも利用することができるだろう。

(石川委員)

- ・ 本日のWGはレガシーがキーワードである。恐らく、今までのWGの中で最も「ポストSDGs」というキーワードが挙げたのではないか。これから私たちはどのような生活をして、どのような景色を見ることになるのだろうか。関西広域連合と打合せを実施した際、机の上にペットボトルがなかった。市長や知事がマイボトルを持って会議に参加していた。あの光景はまさにこれからの未来社会が見る景色である。それを私たちは目にしたにも関わらず、いまだにペットボトルが会議に出てきている。このことは真摯に反省しなくてはならない。
- ・ 西尾総長がおっしゃった「大阪いのち宣言」は非常に興味深いと感じた。本日の議論ではポストSDGsを柱として、文化の多様性や知的充足、幸せ、人間と自然の関係、健康を強調しすぎてはならない等の様々なキーワードが出た。その議論の中心となるのは「いのち」とは一体何かということである。「いのち」は人間に限定するのか、それとも自然やものを含んだものにするのか。「いのち」とは何か、それが「輝く」とは何かという議論が一番の中心になる。どのようにこれを示していくのか、現時点で具体的な進め方のイメージがあればご教示いただきたい。

(西尾氏)

- ・ 本日、ポストSDGsとあえて述べたのには理由がある。2030年をSDGsの達成年限として考えるとすれば、2025年前後から、世界の国々がまとまり、連携を取るための絆として、ポストSDGsの目標を国連として考え始めるのではないかと、思っている。それに対して、大阪・関西万博からどのようなメッセージを発することができるのかは重要であると考えている。万博のプレゼンスを示すよい機会にもなるので、本日ポストSDGsのことをあえて示した。
- ・ 「いのち」の宣言をする際、世界中を巻き込むことが大事だと考えている。万博のメイン会場の一画に多くの参加者が議論できるスペースを設け、さらにインターネットでつないで世界中の人々に参加してもらうようにしたらよいだろう。万博の期間だけでは宣言としてよいものを策定することはできないと思うので、開催の二年ほど前から仕込みを始め、万博の最終日に大きなセレモニーとして「大阪いのち宣言」を発表するという計画は可能であろう。大阪大学の内部には、グッドプラクティスとしてそのようなことを経験した人材がいるので、そうした教員にも知恵を借り、今後具体化していくことができたらよい。

(沖氏)

- ・ まだ2030年になっていないのに、ポストSDGsを語るのはどうなのかという声も国連組織の中にはある。
- ・ 「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の合意のためにSDGsから抜け落ちた要素がある。将来のあるべき社会を作るときに、SDGsだけでよいのかという議論を国連の外部の人々が盛り上げ、深めていくことは非常に重要だと考えている。

(サコ氏)

- ・ 最近のSDGsに関する動きを見ると、ISOが流行した時代を思い出す。会社の名刺にSDGsのマークを入れるといったような、イメージ作りに近いものになっている。
- ・ どう頑張ったとしても、SDGsの17の目標を全て達成することは困難である。SDGsとは別で、現実的な方向に向かっていくほうが取り組みやすいのではないか。例えばアフリカは、「アジェンダ2063」を策定している。SDGsを目標にしながらも、SDGsの目標達成のために使うリソースを振り分け、広く様々なものを巻き込むような取り組みを盛り上げることができるのではないか。
- ・ 今回の万博はSDGsではなくポストSDGsの万博である。SDGsで達成できなかったことを素直に全て示し、それを理解した上で、これからの生活や都市はどうしていくべきなのかを提示する新しい場にしていければよいだろう。

(齋藤委員)

- ・ ポストSDGsについては、今までのWGで別の有識者からも意見が出た。しかし、私自身としては納得できない部分がある。日本はSociety 5.0を進めており、大阪・関西でもその実現が目標となっている。大阪・関西がSDGsの実現に向けて取り組みを進めているが、まだそれを達成できていない。この場においても、やろうと思えばできるマイボトルの持参が行われていないような状況下で、ポストSDGsをやってよいのかという疑問がある。
- ・ 私としては、SDGsの17項目全ては無理かもしれないが、まずはわかりやすい目標や、今から始められるものに関しては、取り組みをするべきだと思っている。コピーライティングの妙で先延ばしにするのは危険ではないか。実証に向けて、SDGsにフォーカスしてもよいのではないかと考えている。

(西口委員)

- ・ 私たちは大阪・関西万博を招致する際に「SDGsを達成するための万博である」と世界に大見得を切っている。それを踏まえると、SDGsを達成していないのに、ポストSDGsを2025年に打ち出すということはまずいのではないか。やれるところまでしっかりとSDGsの取り組みを進める必要がある。ペットボトルの例のように、頑張ればやれることもある。日本の子供は七人に一人が貧困状態にあるというデータも

ある。日本はSDGsを達成して、うまくいっている国だというわけでは決してない。日本国内だけでも、SDGsの達成に向けて努力できることは山のようにある。あまりに簡単にSDGsの達成をあきらめるような議論を万博の企画段階でするのは違和感がある。

- ・ レガシーを分類すると、三種類あるだろう。2025年に「何かを成し遂げた」というタイプのレガシー、「何か加速した」というレガシー、そして「何かが始まった」というレガシーである。「何かを成し遂げた」というレガシーについては、2025年までに、私たちが達成できる大きな社会課題があれば素晴らしいことである。「何か加速した」というレガシーに関しては、SDGsのターゲットイヤーまで後5年という段階で、多くの国が、ある問題に対して、取り組みを加速したというものであろう。「何かが始まった」というレガシーは、数十カ国が万博を契機に新たな取り組みを始めた、「始まりの場」としてのレガシーである。
- ・ レガシーは自然に起こるものではない。意図と意思を持って起こすものである。「何かを成し遂げた」というレガシーを残したいのか、「何か加速した」というレガシーを残したいのか、「何かが始まった」というレガシーなのか。意思を持って取り組みの企画をする。この三種類、どのレガシーを2025年の大阪・関西万博で目指すかを考えたい。

(西尾氏)

- ・ SDGsに記載されている目標は全て根源的な問題である。それをきちんと達成していく大きな責務があると考えている。
- ・ 2030年はSDGsのターゲットイヤーである。全世界の人々が皆で一緒になって、人類の恒久的な平和と幸せのために、SDGsとシームレスにつながりながらも、一歩先のことに関する議論を始めるのもよいのではないか。SDGsとまったく別の目標を掲げるという意味ではなく、現在のSDGsの達成状況を精査しつつ、SDGsの内容をより進化させていくことを考え始める時期として「ポストSDGs」という言葉を示した。ただし、「ポスト」という言葉が誤解を招きかねないことを西口委員のご意見で認識をした。

(西口委員)

- ・ 残り5年で2030年という時期に大阪・関西万博が開催される。明らかに未達成の項目や、少し頑張れば達成できる項目等が見えてくるだろう。国連の事務総長が提出されたレポートによると、SDGsは盛り上がりはいるものの、達成にはほど遠いということであった。「始める」という議論であれば、2030年の2、3年前になれば、国連の中で、SDGsの次の目標が議論され始めるだろう。2025年にいち早く達成できないとあきらめるのではなく、議論を始めるというのは面白いと思う。SDGsを継

承しつつ、次を考えるということである。

(沖氏)

- ・ 「ポスト」と表現すると「何かの次」という印象を与えるので、「拡大SDGs」や「SDGs プラスアルファ」という捉え方をすればよいだろう。
- ・ SDGsの達成に真面目に取り組むとすると、多くの困難が予想される。169のターゲットそれぞれに真面目に取り組むことができるのか。できることから始めるとすると、プラスチックや食品ロスの削減等が挙げられる。しかし、できることだけやるのではなく、達成が難しいことこそやるべきであるというのが、2015年の持続可能な開発目標の合意のポイントである。SDGsの達成に向けて取り組むと宣言して万博を勝ち取ったということであれば、荷は重いと言える。
- ・ 投資を増やすということが各国からの期待である。SDGsの達成に向け、支援ではなく、投資を必要としている国が数多くあることを万博の場で伝えることができればよい。

(サコ氏)

- ・ 私の感覚として、最近のSDGsの取り組みはトップダウン的なイメージが強いと考えている。しかし、分割していくと、日常生活を是正すればゴールに近づくこともたくさんある。一人ひとりが姿勢をどのように変えていくのが大事だと考えている。
- ・ 様々なものを批判的に捉えた際に、評価してみたら評価項目はSDGsに当てはまる、というようなこともあるのではないかと。
- ・ 大学において、SDGs研究センターを作ったり、アジア・アフリカ研究センターやそれに関連した学部を作ることによって、学生たちが自然と自分たちを相対化できる環境を作り出すことができる。
- ・ SDGsに関連して、様々な人々から相談を受けている。女性の地位向上に関して相談しに来るのが、男性の集団である。女性の役職者は何%なのか、育児休暇はどのくらい取れるのか等、疑問点が多くある。そのような部分も含め批判的に見ておく必要がある。

(佐野委員)

- ・ サコ学長が言及した、アフリカ館の問題について話したい。発展途上国が参加しやすいような環境を整えなければならないという意見が今までのWGで何度も出ていたが、実はそれ自体に潜在的な問題があることを指摘していただいたのは初めてである。口頭ではその言葉が使われなかったが、サコ学長が意見書に記載されている「隠れた差別」にどのように対処するのかは非常に重要であると考えている。1960年代から急速に独立国が増え、それまで植民地として、宗主国に付属する形で参加していた多くの地域が、それぞれ一国家として万博に参加するようになった。アフリカ館など、主催者側

が用意するいわゆる共同館は、そのころ途上国に対する出展支援という形で始まったもので、むしろその時点では素晴らしいイニシアチブだった。しかし、それは実のところ、旧来の植民地展示に新しい看板を付け替えただけであるという性格は否めない。その構造が、今もなお万博の中に残っているということだ。

- ・ ミラノ万博の時、例えば「アフリカ館」といった地域の名称の代わりに「コーヒー館」や「カカオ館」というくくり方がされており、一見面白い工夫のように見えるが、その無神経さにぞっとした。そのような発想の型を何とかして破りたい。今までのWGで、入場者数のカウント方法を革新する、万博の会場の概念を変えていく等、万博のあり方に新規性を残すことができそうな提案があった。それに加えて、発展途上国の出展支援のあり方も革新していくことができればよい。
- ・ さきほど来、SDGsの議論が行われているが、そもそもなぜ世界が今になってSDGsという目標を掲げなければならないのか。こうして長期にわたって支配・被支配の関係が存在したことこそが、その世界史的な背景である。その構造をひっくり返して、世界の真の多様性を表現していくという課題は、チャレンジし甲斐のあるものである。そうした会場づくりをしていくべきだと考えている。
- ・ もう一点、先ほどから多くの方が言及し、これまでのWGでも数多くの議論があった、広範な人たちを巻き込んで準備していくということについて話したい。このことには二つの層があると考えている。一つは、若手のデザイナーや、プロとして大きくはない会社・組織に所属している方々、さらには学生を、万博を「つくる」という過程に巻き込んでいくということである。もう一つは、この万博をきっかけに「いのち」を巡る議論を津々浦々に広げ、あらゆる普通の人たちを議論に巻き込んでいくという層である。これらに本気で取り組みたいと考えてきた。しかし、このように議論している裏で、従来型の大企業にグランドデザインを発注する準備が始まっているのは非常に残念である。WGの議事録を通じて、少なくとも歴史的に、これだけ多くの方々がその点で新しい方を望んでいたことが残ることは、せめてもの幸いだが、ここからでもなお、国は従来の業界構造を覆す万博を実現するように、真剣に取り組んでいただきたい。その方向で協力できることがあれば、していきたい。

(豊田委員)

- ・ 建築家として会場計画等に関わっているため、会場計画とレガシーという視点からご意見を伺いたい。建設物や高速道路等が1964年の東京オリンピックや1970年の大阪万博開催時におけるレガシーの一つであった。
- ・ 会場計画が土木的・建設的なものに限らず、システムや様々な体験、情報等とシームレスにつながっていくということが避けられない2025年という時代において、レガシーという言葉に期待するイメージは、モノになるのか、それともシステムなのか、データなのか、経験なのか、関係性なのか。レガシーについてのイメージやこうあるべき

だという意見を伺いたい。それが漠然としているのであれば、それはどこに存在するものなのかイメージを伺いたい。例えば、会場の中に残る太陽の塔がレガシーになるのか、それとも高速道路になるのか。

(沖氏)

- ・ 残そうと思って残すものはだいたい迷惑なものである。モノを残すとか、コトを残すというよりも、一生懸命よいものを作り、その中のいずれかが受け入れられ、古びてもメンテナンスをされて後世に残していきたいと思われるものになるのだと考えている。
- ・ 後世に残ればよいという野心を持って、クリエイターの方に競ってもらおうということはよいものが残ることにつながるのではないかと考えている。それはモノであるかもしれないし、コトであるかもしれない。それを私たちではコントロールすることはできないのではないか。

(小西氏)

- ・ 派手に何かを残したら、そこに参加したくないと考える人も出てくるだろう。レガシーとして残すのは、モノになるのか、コトなのか、それとも人なのか。うまくいった何かが起こり、後でそれに参加したくなるようなものがレガシー化されるということなのだと思う。
- ・ 「レガシーを残していく」という意思是、「よいものを作っていく」という意思とほぼ同じだと考えている。自分の中でレガシーとは「参加したくなるものにしたい」と強く思うということなのではないかと考えている。

(西尾氏)

- ・ レガシーは、後から振り返ってみて初めてレガシーであったと気付く側面がある。万博に向けて、ダイバーシティを持って、斬新な建物群の設計・施工やmanifesto等、様々な活動を展開しておくことが重要である。あるときに振り返ってみると、それらがレガシーとして残っていると気付くのではないか。
- ・ 最初から詰めて考えるというよりも、様々な取り組みを行い、それが後にレガシーとして証明されていくという考え方もあるだろう。

(サコ氏)

- ・ レガシーをmanifestoのようにフォーマット化する必要がどこまであるのかは議論の余地がある。下準備や仕掛けは必要だが、結果としてどういったものがレガシーとして残るのかは実際にやってみないとわからない。色々な仕掛けを作るのが重要だと考えている。関西で開催する万博であるということも含めて、人間の関係性を様々なパターンで体験することができるというのが重要なのではないか。そこから自分の自然観

や人間関係、人との関わり方等、参加者一人ひとりの中に色々なものが残る。

(高橋氏)

- ・ 本日、ピクトグラムの例を提示した。理想の社会や医療と言ったのは、会場でよいと感じてもらって、国に帰ってやってみたいと思われることである。万博の効果が後の世界に広がる、そうしたことをやっていくべきなのではないか。

(野村氏)

- ・ 取り組んだ結果、自然に残っていくものもあると考えているが、大阪・関西の現状や今後を考えると、産業戦略や都市戦略といったグランドデザインをきちんと考え、それらが万博を契機に残っていくということが望ましい。今後の関西全体を考えると、そうしたことを制度的に残していくことが大事なのではないかと考えている。

(堀江氏)

- ・ モノというよりは、そこでできた新しい生活習慣や生き方等が継承され、新しい文化を作るような形になればよい。狙って残すというよりは、一生懸命作り上げたものが残っていくという形になる。それが何なのかは実際にやってみなければわからないが、AIやロボット時代の新しいライフスタイルを残すことができればよいのではないか。
- ・ 自動運転等が2025年には実現しているだろう。そこから10年後や20年後を考えると文化が重要になる。そのようなものが残る万博にできればよい。

(2025年日本国際博覧会協会)

- ・ サコ学長や、佐野委員の意見を聞き、今までの万博において、途上国は気が乗らない気持ちで参加してきたのではないかと感じた。そのような気持ちで途上国が参加をするということがあってはならない。
- ・ 途上国を企画段階からサポートするべきだという意見があったが、開催まで時間がない中、それをどのように実現するべきなのか意見を伺いたかった。
- ・ 中小企業についての意見が出ていたが、非常に重要な視点であると考えている。万博に対して、大企業の腰が重いように見える中、スタートアップをはじめとした企業とどのように万博を盛り上げていくのかは重要な視点である。

(橋爪委員)

- ・ 2025年日本国際博覧会協会の内部でも議論いただければと思う。本WGでも今までの議論を取りまとめる過程で議論を深めていきたい。
- ・ 本日のWGはレガシーがテーマであった。これまでのWGでも大阪・関西万博のレガシーはハードではなく、ソフトになるのではないかと意見があった。西口委員から、

レガシーについて三つのカテゴリーが挙げられた。SDGsに関しては、ポストSDGsを検討することの是非について議論があった。キーワードとして多様性が挙げられ、多くの人に参加する万博にしていきたいという意見があった。特に若い世代の参画についての言及が多かったが、これまでのWGでも同様の意見は数多くあった。

- ・ 本日の議論を全て網羅するのは困難であるが、集約すれば以下の八点となるだろう。
- ・ 一点目として、ポストSDGsの社会は個を中心に展開し、個が尊重されるものになるという意見があった。「いのち輝く未来社会」というテーマと響き合う考えであり、そのような将来の社会について、参加者が考える博覧会ができればよい。
- ・ 二点目として、22世紀を見据えた視点を持つと同時に、ビジネスを通じた社会課題の解決が最終的には利益になるという意見があった。「三方よし」についての話もあった。大阪の中小企業が世界に投資をすることができる環境を整備することが重要だという意見もあった。逆に万博会場は資金が集まる場にすべきだという意見もあった。
- ・ 三点目として、多くの水路が流れる大阪の特性を踏まえ、海とのつながりについての意見があった。世界とつながるゲートとなる場所であり、難波宮に関する意見もあった。今回の博覧会は、海外との共創によって新しいものが生まれる場としたいと私も考える。
- ・ 四点目として、祭りというキーワードが挙げられた。オリンピック・パラリンピックとは対照的な、知恵の祭典が万国博覧会であるという意見があった。スタートアップ企業によるビジョン発表が行われる場など、ビジョンによる賑わいを目指すべきであるという意見もあった。歌って踊れる万博、話したくなる万博にするべきだという意見もあった。万博そのものをいかに多くの人に参加する祭りとするのができるのかが重要だということであろう。祝祭都市というキーワードも挙げられた。
- ・ 五点目として、万博を通じて、未来の医療のあり方を考えるべきであるという意見があった。「健康」は幻想であるという指摘や、本当にインクルーシブな社会を示すべく、未来の病院のようなものをデザインし、モデルを示すべきだという指摘があった。会場に来ると健康寿命が一歳延びるという仕掛けについての意見もあった。
- ・ 六点目として、アワードや宣言をはじめ、様々なことを博覧会から発信するべきであるという意見があった。「いのち」と向き合うために課題を世界に投げかけ、検討した結果を「大阪いのち宣言」として世界に発信するべきだという具体的な提案もあった。全ての参加国と共にフォーラムを行い、宣言を出すべきだという意見もあった。毎日一つのアワードを実施し、180以上の受賞者を揃えるという具体的な提案もあった。
- ・ 七点目として、万博会場を含む大阪・関西のベイエリアのグランドデザインを再構築して全体計画を立案するべきだという指摘があった。
- ・ 八点目として、これからは人間関係を固定しない生き方が大事であるという意見があった。WGではこれまで若い世代について強調することが多かったが、年齢や世代、バックグラウンドや文化を問わず、博覧会場が、従来とは異なるコミュニティを作る場と

することが重要であると私は考えている。

- ・ 今回のWGで、有識者とのフリーディスカッションは終了となる。今後はWGと並行して進めている個別ヒアリングの意見と合わせて議論の取りまとめを進める。

以上